

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00595

研究課題名（和文）アスペクトとヴォイスの「好まれる言い回し」の認知類型論的研究：音声言語を中心に

研究課題名（英文）A Cognitive Typological Study of "Native-like Selection" in Aspect and Voice:
Focusing on Spoken Language

研究代表者

副島 健作 (Soejima, Kensaku)

法政大学・国際文化学部・教授

研究者番号：60347135

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、言語の「自然さ」、「語らしさ」とはということについて理論化し、説明を試みることを目的とし、主体・主観化現象に関わる認知様式のあり方の類型化を「音声言語」という視点を取り入れ、眼前の状態の捉え方に影響する要因についてより精緻に検証することを試みた。具体的には、人為的行為の結果状態を表す現象を対象とし、諸言語がどのような構文を用いるのが自然かを、多言語パラレルコーパスから得た文字資料とビデオ発話実験という手法により母語話者から収集した音声資料をもとに検証し、結果に至る過程を認識したかどうか結果表現選択に影響することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文字資料およびビデオ発話実験による「音声言語」資料において文法研究を推進した。結果の状態を描写する場面で用いられる表現について日本語母語話者への実験から収集したデータを分析したところ、結果に至る過程を知覚したかどうかで表現選択の傾向が異なることが分かった。同様の実験により韓国語母語話者、エストニア語母語話者からもデータを収集し、分析を試みた。その成果として、各言語の音声言語において結果に至る過程を認識したかどうか結果表現選択に影響することが示された。

この成果は、音声言語の「好まれる言い回し」が言語間でどのように異なるのかの解明に貢献し、日本語も含めた外国語の音声教育への応用が期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to incorporate a "spoken language" perspective into the typology of cognitive styles involved in the phenomenon of subjectivity and subjectification, in order to theorize and attempt to explain what is meant by "naturalness" and "native-like selection" in language, and to examine more precisely the factors that influence how we perceive the state before us. Specifically, based on textual data obtained from a multilingual parallel corpus and spoken data collected from native speakers by means of a video speech experiment, we investigated what expressions are likely to be chosen when expressing the resultant state of volitional actions in various languages. The study revealed that whether or not the process leading to the result is recognized influences the choice of resultative expression.

研究分野：言語学，日本語教育

キーワード：アスペクト・ヴォイス 好まれる言い回し 認知類型論 音声言語 言語の「自然さ」，「語らしさ」

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「好まれる言い回し」は、英語は「する」言語であり、日本語は「なる」言語である(池上 1981)と言われて以来、個別言語の認知言語学的特徴として研究が進められてきた。誰かが財布を盗んだことを「財布を盗まれた」と受身構文で言うのが日本語では自然であるが、英語では *Someone stole my wallet.* (誰かが私の財布を盗んだ)、ロシア語では *U menja ukrali košelek.* (私には(誰かが)財布を盗んだ(主語がなく、動詞は3人称複数形))と表現するのが自然である。これは客観世界に対する事態認識とその言語化の傾向が言語によって異なることを示している。

これまでの外国語教育を瞥見すると、言語習得のための文法・表現の捉え方という点に関して、1つは、正確さを重視し、教科書に記述されている文法・語彙・テキストを正しい音声で正確に読み上げる「文字言語」という視点から文法・表現を把握するという姿勢、もう1つは、コミュニケーション活動の成功を重視し、目的を達成するための「音声言語」という視点から文法・表現を把握するという姿勢がある。後者では、誤解を与える表現、感情を害する誤用をいかに避けるか、自然な言い回し、日常違和感なく用いられる表現をいかに身につけるかが課題となる。

昨今の日本語教育では、文法知識があると認められる日本語能力試験のN1合格者でも、円滑なコミュニケーションができないものは多く存在する。「文字言語」という視点しか有しないことによって、目的達成のための言語習得ができないという問題が生じていると考えられる。その解決策の1つとして、本研究は、「好まれる言い回し」の「音声言語」概念に着目する。国外でしか学習したことがない日本語学習者の中にも「自然さ」を身につけている者が見られる。その多くは、日本のアニメやドラマに興味を持ち、視聴することによって、音声を介して日本語を身につけている。日本語を効果的に教えるためにも、なぜ当該学習者が「日本語らしい日本語」を習得できたかを明らかにし、日本語教育の音声教育として学習者にどういうことをどう教えればよいのかを、現場教員に明示することが急務である。また、日本語音声への理解を深め、コミュニケーション能力を感覚的にではなく、理論的かつ正確に測定する方法の開発が待たれる。

本研究では、「言語の可変性は社会文化のあり方との間で相対化されており、伝達慣習によって選択されている」という認知類型論的アプローチを採用して、音声言語における文法に見られる「自然さ」、「～語らしさ」の特徴を把握して記述し、Sapir (1921) 以来絶えず探求されてきた言語と認知や思考との関係性を解明する。

2. 研究の目的

(1) 言語の「自然さ」、「～語らしさ」ということはどういうことかについて理論化し、説明を試みる。すなわち、客観世界に対する事態認識の言語化とその傾向が言語によって異なる現象について考察し、構文間の連関と対立の関係に反映される話者の事態認知上のカテゴリー化の動機づけを明らかにする。具体的には、日本語、韓国語、ロシア語、エストニア語の人為的事態の結果の表現の比較対照を通して、それぞれの言語における各構文の対応関係を明らかにするとともに、異なる構文と事態把握との関連性を指摘し、人為的事態の結果を表す動作主非顕示の構文の言語における拡がり考察する。

(2) 人為的行為の結果状態を表す現象を対象とし、諸言語がどのような構文を用いるのが自然かを、ビデオ発話実験という手法により母語話者から収集した音声資料をもとに検証する。音声言語における構文のあり方について意味と機能と構造の面から有機的・相関的に特徴づけて検証し、明らかにすることで、認知類型論の発展に資するとともに、その成果を外国語教育の現場へと還元することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 客観世界に対する事態認識の言語化とその傾向に関する研究において、データ収集は同じ内容が韓国語、ロシア語、エストニア語で翻訳されたパラレルコーパスを使用した。パラレルコーパスはロシア語以外は報告者がデジタル化したものである。日本の小説1編、村上春樹著『ノルウェイの森』とその韓国語翻訳本、ロシア語翻訳本(Web版)、エストニア語翻訳本の計4編を使用した。これを選んだのは、有名な作品であり、韓国語、ロシア語、エストニア語の翻訳が市販または公開されていて、テキストが公に認められたものであることと、情景の描写が多く、分析の対象とする結果状態の場面が多く描かれているからである。

日本語版においてシテイル(受動文のシテイルも含む)とシテアルの文を同定した。こうして抽出したシテイルとシテアルの例を1つ1つ丁寧に観察し、動作手の明示がないという形態的特徴と、人為的事態の結果を表しているという意味的特徴を基準に、動作主が不定の人為的事態の結果を表している場面だけを取り出した。それに対応する韓国語、ロシア語、エストニア語の文と共に分析の資料とした。

個別言語を観察するにあたり何を自動詞と呼び、何を他動詞と呼ぶかにはいくつかの分類法が考えられるが、ここではエストニア語の自他動詞をそれぞれ以下のように定義する。

- a. 他動詞: 主格で表示される動作主と、(直接)目的語の格(主格、属格、分格)で表示される対象を項としてとる動詞
- b. 自動詞: 主格で表示される項を1つだけとり、それと呼応一致関係にある動詞

(2) 「音声言語」における眼前の状態の捉え方に影響する要因に関する研究においては、日本語母語話者に対しビデオ発話実験を行った。人為的な影響によって変化した事象を写したビデオクリップを10件作成し、実験題材にした。実験協力者に見せる変化事象の内容を設定する際には、位置変化と状態変化のどちらも考慮し、日常生活の中でよく見かける場面にした。実験協力者は日本のT大学に在籍している日本語母語話者20名である(女性6名、男性14名、平均年齢20歳、 $SD=3.0$)。実験協力者には調査の目的と内容を口頭で説明し、承諾を得てから行なった。

実験ではコンピュータで映像を提示して、協力者にビデオの内容を口頭で説明してもらった。提示した画像は静止画で、変化前の画像を見た後、変化後の画像を見て、日本語で目の前にいる人に分かるように口頭で描写してもらった。被験者を2つのグループに分け、1つのグループは変化の過程を動画で示した後、変化後の写真について描写させた。もう一方のグループは変化の過程を見せずに、変化後の写真について描写させた。被験者の発話はすべて録音し、実験後に文字化した。人為的事態の結果の表現を分析するため、結果状態を描写している部分をまずは抜き出し、サレテイル、自動詞シテイル、シテアル、存在文「～に～がある」の全701例を分析対象にした。そこには「装飾をする」、「配置する」などの動詞「する」との機能動詞結合も含まれる。終止的な述語と、シテイテやシテアッテなどの連用中止形を含む複文の節の述語を分析対象としたが、名詞節は除外した。また、画像そのものの説明(「～が写っています」など)も分析対象から外した。

4. 研究成果

(1) 多言語パラレルコーパスにおける、動作主が不定の人為的事態の結果を表す場面での、受動文、シテアル、不定人称文、自動詞文、その他の表現(いわゆる意識も含む)の使用の分布状況を示す。

表1. 人為的事態の結果を表す場面における構文の分布状況(下段は%)

自他 構文	他動詞			自動詞	その他	計
	受動形	シテアル	不定人称文			
日本語	34	48	0	128	0	210
	16%	23%	0%	61%	0%	100%
韓国語	78	0	0	54	78	210
	37%	0%	0%	26%	37%	100%
エストニア語	0	0	56	72	82	210
	0%	0%	27%	34%	39%	100%
ロシア語	59	0	6	59	86	210
	28%	0%	3%	28%	41%	100%

表1に示されているとおり、日本語は自動詞文の使用が61%で、シテアルや受動文は少なかった。それに対して、韓国語は受動文とその他がそれぞれ37%、自動詞文が26%。エストニア語は自動詞文が34%でその他が39%、不定人称文が27%、ロシア語では自動詞文が28%で、受動文も28%、その他が41%という結果であった。つまり受動文は韓国語、自動詞文はエストニア語で比較的使用が多いということが分かった。

(2) 多言語パラレルコーパスにおいて日本語の受動文、シテアル、自動詞文が各言語でどのように表現されていたかを調査した。以下に結果を示し、各言語の特徴を示す。

① (状態) 受動文

日本語では受動文で表現された全34場面において、受動文の選択は、韓国語では56%、ロシア語では44%と韓国語のほうが多く、エストニア語の不定人称文は65%だった。自動詞文はロシア語とエストニア語が6場面、韓国語5場面とほぼ同程度であった。

(i) …、どの窓もカーテンが引かれていた。

韓: …, hanakath-i	chang-ey-nun	khethun-i	tuliwe-cyε-ss-ta.		
一様に-AD	窓に-TOP	カーテン-NOM	引く-cita-PAST-DECL		
露: …, i na	vecx	okn-ax	by-l-i		
そしてに	全部.PL.LOC	窓-PL.LOC	BE-PAST-PL		
zadernu-t-y		stor-y			
引く.PFV-PPP.PL		カーテン-PL.NOM			
エ: Kōiki-del	aken-del	olid	kardina-d	ette	tōmma-tud.
すべて-PL.ADE	窓-PL.ADE	BE.PAST.3.PL	カーテン-PL.NOM	前へ	引く-PPP

②シテアル

日本語ではシテアルによって表現された場面は48あった。韓国語とロシア語はそれぞれ38%、42%が受動文で表された。また、エストニア語はそれを上回る52%が不定人称文で表された。(ii)では韓国語は受動文、エストニア語では不定人称文、(iii)はロシア語の受動文の例である。

- (ii) …, 白いコートが椅子の背にかけてあった。
 韓: ..., hayan kotu-ga uyca dung-ey kel-lye-ss-ta.
 白い コート-NOM 椅子 背-に かける-i/hi/li/ki-PAST-DECL
 エ: ..., valge mantel oli tooli
 白い-SG.NOM コート-SG.NOM BE.PAST.3.SG 椅子.SG.GE
 seljatoe-le riputa-tud.
 背もたれ-SG.ALL かける-PPP
 (iii) 「それ洗ってあるから食べられるわよ」
 露: On my-t-yj, mož-eš' priamo
 3.M.SG.NOM 洗う-PPP-3.M.SG できる IPFV-PRES.2.SG すぐ
 tak es-t'.
 そうやって 食べる.IPFV-INF

③自動詞文

日本語で自動詞文が用いられた全153場面のうち、韓国語とロシア語ではそれぞれ32%と34%、エストニア語では44%が自動詞文であった。

- (iv) 螢はインスタント・コーヒーの瓶に入っていた。
 韓: Kuke-n insuthenthukhephi byeong-ey tul-e isse-ss-ta.
 それ-TOP インスタントコーヒー 瓶-に 入る-ている-PAST-DECL
 露: Svetliáčok side-l v bank-e
 螢.M.SG.NOM 座る.IPFV-PAST.SG.M に 瓶-F.SG.LOC
 iz-pod rastvorim-ogo kofe.
 の インスタント-SG.N.GEN コーヒー.N.SG.GEN
 (v) 四月四日の午後に通の手紙が郵便受けに入っていたが, ...
 エ: Neljanda aprilli pärastlõunal maandu-s mu
 4日.GEN 4月.GEN 午後.ADE 着く-3.SG.PAST 1.SG.GEN
 postkasti-s üks kiri, ...
 郵便受け-INE 一つ 手紙.SG.NOM

④「その他」の表現

ここで言う「その他」の表現というのは、日本語の受動文、シテアル、自動詞文で表された場面において、韓国語、エストニア語、ロシア語では受動文や不定人称文、自動詞文以外の構文が使用された例のことを指す。全210場面における使用率は、存在文は韓国語30場面、14%、エストニア語40場面、19%、ロシア語36場面、17%で、どの言語においても一定数は見られた。一方、他動詞能動文は韓国語27場面、13%、エストニア語2場面、1%、ロシア語16場面、8%で、韓国語とロシア語では多少使われるが、エストニア語ではほとんど見られなかった。

- (vi) 「それ洗ってあるから食べられるわよ」
 韓: “ike ssis-un kenikka mek-eto tway.”
 これ 洗う-RT ものだから 食べる-ても いい
 (vii) だってあなたに会えないのはやはり淋しいもの、と緑の手紙には書いてあった。
 エ: Lõppude lõpuks olen ka mina Väga kurb,
 終わり.PL.GEN 終わりに BE.PRES.1.SG また 1.SG.NOM 非常に 淋しい SG.NOM
 kui me ei kohtu, kirjuta-s ta.
 もし 1.PL.NOM NEG 会う 書く-3.SG.PAST 3.SG.NOM
 露: V pis'm-e ona pisa-l-a, što ... ,
 に 手紙-N.SG.LOC 3.F.SG.NOM 書く.IPFV-PAST-SG.F REL
 poskol'ku, ne vstreča-ja-s' so mnoj,
 だって NEG 会う.IPFV-AP-RFL と 1.SG.INS
 ona čuvsetvu-et sebja odinoko.
 3.F.SG.NOM 感じる.IPFV-3.SG.PRES 自分.ACC 一人に
 (viii) 「冷蔵庫にビールが入ってるから、そこに座って飲んでくれる？」
 韓: “nayngcangko-ey maykcwu iss-unikka keki anca-se masi-ko iss-ullay?”
 冷蔵庫-に ビール ある-から そこに 座る-して 飲む-ている-しよう
 (ix) テーブルの上には小さな白い灰皿と新聞と醤油さしがのっていた。
 エ: Laua-l olid väike valge
 テーブル-SG.ADE BE.PAST.3.PL 小さい.SG.NOM 白い.SG.NOM
 tuhatoos, ajaleht ja sojakastekann
 灰皿.SG.NOM 新聞.SG.NOM そして 醤油差し.SG.NOM
 露: Na stol-e by-l-a malen'k-aja pepel'nic-a,
 に テーブル-M.SG.LOC BE-PAST-SG.F 小さい-SG.F.NOM 灰皿.-F.SG.NOM

gazet-y,
新聞-PL.NOM

butylk-a
瓶-F.SG.NOM

sorv-ogo
大豆-SG.M.GEN

sous-a.
ソース-M.SG.GEN

(3) 各言語の自動詞、受身、不定人称文を比較し、さらに各言語の構文使用の傾向と事態把握との関連について考察した結果、以下の点が明らかになった。

- ① どの言語も自動詞文を使用するが、日本語は特に多い。エストニア語は不定人称文、ロシア語や韓国語は受動文の使用も自然である。
- ② 自動詞文、受動文、不定人称文、シテアル構文の構文的特徴は事態把握と関連しており、対象が主語であるか目的語であるか、動作主が明示可能か否かで特徴づけられる。

以上の分析により、日本語には主観性の高い傾向があることが確認できた。この結果は、「言語の自然さ」、「～語らしさ」が認知類型の違いで説明できることを示唆するものである。

(4) 日本語母語話者に対し行なったビデオ発話実験では、結果に至る過程を知っているかどうかの結果表現の使用にどう影響するかを調べた。各グループが使用した表現数を表 2 に示す。静止画のみと動画ありの各グループの使用について比較するため、カイ二乗検定を行った結果、有意な差が得られた ($\chi^2(3) = 37.661, p < .01, V = .232$ (V はクramer の V 係数))。残差分析の結果、静止画のみは動画ありに比べてサレテイルを有意に使用することが、および、動画ありは静止画のみに比べて存在文を有意に使用することが示された。

表 2. 過程の認識と「結果を表す表現」使用

	サレテイル	自動詞シテイル	シテアル	存在文	計
静止画のみ	134	84	64	68	350
動画あり	75	71	76	129	351
計	209	155	140	197	701

(5) また、場面ごとの使用構文の分布の差異の比較を行い、事象解釈の特徴について考察した結果を簡潔にまとめ、日本語母語話者が音声言語において結果状態をどのように表現するか、その傾向について記述すると次のようになる。

- ① 日本語母語話者は音声言語においても、眼前の状態を結果として捉えた場合、サレテイル、自動詞シテイル、シテアルを使用する。
- ② 結果の状態を描写する際、変化の過程の認識によって表現は変わる。過程を意識した場合はシテアル、過程を意識しない場合はサレテイルか自動詞シテイルを選択する。
- ③ 眼前の状態を単純に状態として捉えた場合、存在文を使用する。

(6) 池上 (1981) は日英語の表現構造を比較対照し、日本語は〈出来事全体〉を捉え、事態の〈成り行き〉という観点から表現しようとする「ナル」的言語 (=主観的把握) であるが、英語は事態に関与する主体や行為を際立たせるような形で表現しようとする「スル」的言語 (=客観的把握) であると述べる。結果を表す受身文や自動詞などの使い分けの要因を検討してきた本研究の成果に照らせば、シテアルは自動詞シテイルやサレテイルに比べて事態に関与する主体や行為を際立たせるような形で表現するのでより傍観者、ないし観察者として客観的に事態を把握し、自動詞シテイルはサレテイルやシテアルに比べて現場に没入してその事態に臨場する当事者であるかのように体験的、主観的に事態把握をするということになる。こうして、各構文がどの程度主観性の基準となり得るかという点にも一定の成果を示すことができた。

(7) 期間全体を通じて「音声言語」という視点においてビデオ発話実験による文法研究を推進した。結果の状態を描写する場面においてどのような表現を用いるか、上述のとおり日本語母語話者への実験から収集したデータを分析したところ、結果に至る過程を知覚したかどうかで表現選択の傾向が異なることが分かった。他の言語話者への実験は国内で韓国語母語話者への実験を実施することができた。エストニア語のデータは現地へ赴き、同様の実験により母語話者のデータを収集した。その成果として、日本語以外の言語話者への実験においても、音声言語において結果状態を描写する際、結果に至る過程を認識したかどうかの結果表現選択に影響することが示唆された。

ここで得られた成果を基に、引き続き音声言語における構文のあり方について意味と機能と構造の面から有機的・相関的に特徴づけてさらに深く検証し、明らかにしていく予定である。

<引用文献>

Sapir, E. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt, Brace
池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 副島 健作	4. 巻 27巻1号
2. 論文標題 音声言語における結果表現の使い分け - 過程の知覚はどう影響するか -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 副島 健作	4. 巻 24
2. 論文標題 受身や自動詞とその周辺構文における結果の表現 - 日本語、韓国語、ロシア語、エストニア語を対象に -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 異文化	6. 最初と最後の頁 107-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 副島 健作	4. 巻 29
2. 論文標題 日本語の五十音図再考 新たに作られつつある音節を求めて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 63-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Soejima, Kensaku	4. 巻 1
2. 論文標題 Japanese Language Learners Understand 'the Other' in the Result Expressions?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Values of the Other, GPJS (Tohoku University)/LITT&ARTS and ILCEA4 (Grenoble Alpes University)	6. 最初と最後の頁 149-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 副島 健作	4. 巻 28
2. 論文標題 日本語学習者に地方共通語を教える必要はあるか?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 副島 健作
2. 発表標題 現代日本語の aspekto - 事象の事態把握を中心に -
3. 学会等名 国際シンポジウム「東西文化の融合」(オンライン)(国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------